

「令和2年度『佐賀県病害虫防除のてびき（果樹）』の主な改正点

「令和2年度の『佐賀県病害虫防除のてびき（果樹）』の主な改正点を紹介します。

『佐賀県病害虫防除のてびき』の本文は、①「かんきつ」、②「なし」、③「ぶどう、かき他」の3つに分けて佐賀県庁のホームページで公開されています（担当：佐賀県園芸課）。必要な部分をダウンロードするか、印刷して利用してください。肥料、除草剤、植調剤についても同じアドレスで公開されていますので、併せて御覧ください。なお、薬剤は、随時登録内容の変更、登録の取り消しが行われています。その場合は、すぐに『佐賀県病害虫防除のてびき』の該当薬剤の記載内容について変更あるいは削除を行っています。

アドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321964/index.html>

薬剤散布及び防除指導を行う際には、必ず、各薬剤の使用方法（希釈倍数、使用回数、収穫前使用日数）について、独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」で最新の登録内容を確認してください。

－ 令和2年度に追加・変更した主な項目 －

防除対策の強化を図るために、以下の病害虫については最新の知見等を加えました。

- ①ハウスミカンの難防除害虫「ミカンハダニ」
- ②カンキツ、ブドウで問題となっている「チャノキイロアザミウマ」
- ③カキ等の枝幹害虫「フタモンマダラメイガ」
- ④海外からの侵入害虫「チュウゴクナシキジラムシ」
- ⑤モモの難防除病害虫「せん孔細菌病」と「カイガラムシ」

表1. 令和2年度の「防除のてびき」に新たに追加した薬剤

作物名	対象病害虫名	処理時期/追加薬剤
カンキツ	灰色かび病	満開期、5月下旬(落弁期) パレード15フロアブル
カンキツ	かいよう病	4月中下旬、6月中旬 クプロシールド
カンキツ	アザミウマ類(ハウス)	ファインセーフフロアブル、ディアナWDG
カンキツ	アザミウマ類(露地)	5月中下旬、6月上旬、6月中下旬 アドマイヤープラスフロアブル
カンキツ	ミカンハダニ(露地)	8月下旬～10月上旬の(ミカンサビダニが同時防除可能な剤) スピウスフロアブル
カンキツ	ミカンハダニ(ハウス)	スワル/バンカー 満開3週間後(果径20mm)を目安に設置
なし	黒星病	アクサーフロアブル
なし	黒星病	(収穫後)8月下旬～11月上旬 ペフラン液剤25
ブドウ	べと病	5月下旬(落弁期) ゾーベックエニベル
モモ	カイガラムシ類	5月上旬～中旬 モベントフロアブル

－ 令和2年度に追加あるいは削除した薬剤 －

殺菌剤延べ5剤、殺虫剤延べ6剤の合計11剤を追加、殺菌剤延べ1剤、殺虫剤延べ1剤の合計2剤を削除しています（表1、2）。

表2. 令和2年度の「防除のてびき」から削除した薬剤

作物名	対象病害虫名	削除した薬剤(理由)
カンキツ	褐色腐敗病	リドミル銅水和剤(クレフノン200倍加用)を削除 (製造中止で流通がないため、文章・表中から削除)
カンキツ	ミカンネコナカイガラムシ	ネマモール乳剤の削除 (登録失効のため)

－ 薬剤の追加・削除及び内容の主要な変更点 －

○ かんきつ

<灰色かび病>

耐性菌が発生しやすい本病の防除対策を強化するために、満開期と5月下旬の落弁期にパレード15フロアブルを追加しました。本剤は、そうか病にも登録があります。今年度産は裏年傾向でありましたので、次年度産は表年と予想されていることから、花卉が多く、灰色カビ病の発生に最適な条件になると思われます。先ずは、剪定時に防風樹を含め園内の通風を確保するとともに、薬剤防除をしっかりと行い、樹を揺するなどして花卉を落とす等の耕種的な対策も加えながら、発病を抑制します。

<かいよう病>

細菌性病害である本病に対して銅剤のクプロシールドを4月中下旬、6月中旬に追加しました。昨年は度重なる強風雨と台風の襲来で温州みかんでもかいよう病の発病が認められる園があったことから、越冬菌密

度は平年より高いと予想されています。そのため、冬季の間に防風対策をしっかりと行うとともに、発芽状況をしっかりと観察して、生育状況に合わせて防除を開始します。近年は暖冬傾向にありますので、生育の早い地域・園地では2月下旬頃から防除を開始します。

<褐色腐敗病>

リドミル銅水和剤については、製造中止にともない、流通量が少なくなってきたために、てびきから削除しました。

<アザミウマ類(ハウス)>

難防除害虫の一つであるアザミウマ類対策としてファインセーブフロアブルとディアナWDGを追加しました。本虫の防除対策は、薬剤防除だけでは困難なので、天井に紫外線カットフィルムを展張する、サイドネットにタイベック折込ネットや目合いの細かな防虫ネットを利用する等の物理的な対策も行います。まずは、被害が問題となる園地から計画的に準備をします。

<アザミウマ類(露地) 特にチャノキイロアザミウマ>

防除対策の強化として、アドマイヤープラスフロアブル(5月中下旬、6月上旬および6月中下旬)を追加しました。本剤はアドマイヤーとキラップとの混合剤なので、単剤と混合剤を合わせた各成分の総使用回数を超えないように注意します。なお、近年、写真のような果実被害を及ぼす第2世代成虫(以前は6月中下旬→近年6月上旬)の発生が早まっています。また、地域によっては5月中旬頃に発生する第1世代成虫による被害がみられ、さらに第2世代より第3世代成虫(6月中下旬)の被害が甚大な園地もあります。いずれにしても、地域・園地の実情に合わせて防除を実施します。



写真① 6月頃の加害による果梗部被害

写真② 同時期の果頂部被害

<ミカンハダニ(露地)>

ミカンハダニの防除対策として、メビウスフロアブルを追加しました。本剤はアグリメックとバロックの混合剤なので、上記の説明にもあるように単剤と混合剤を合わせた各成分の総使用回数を超えないように注意します。また、ミカンサビダニにも登録があるので、両害虫の発生状況に応じて、薬剤を選択します。

<ミカンハダニ(ハウス)>

難防除害虫の横綱であるミカンハダニの対策として、天敵資材である「スワルバンカー」を追加しました。本資材はハダニを餌とする天敵「スワルスキーカブリダニ」を有効成分とした剤です。化学的な合成農薬と異なり、利用したいからと言っても、すぐに手に入るものではありません。また、農薬の中には天敵に悪影響を及ぼす薬剤があるため、本剤を利用するにあたっては、防除計画を改めて立てる必要があります。例えば、殺菌剤であるジマンダイセンも影響が大きいです。是非使用したい・興味がある場合は、少なくともビニル被覆前までには必ず指導機関に相談します。

＜ミカンネコナカイガラムシ＞

ネマモール乳剤については、登録失効のため、てびきから削除しました。

＜ナシ黒星病＞

重要な防除時期である生育期の防除剤として、アクサーフロアブルを追加しました。本剤は、DMI 剤と新規系統の SDHI 剤の混合剤です。黒星病の防除薬剤としては、保護＋治療効果を有する DMI 剤（スコア等）、QoI 剤（スクレア等）および SDHI 剤（オルフィン等）、それとデラン、キノンドー等のような保護殺菌剤が挙げられます。しかし、他県では DMI 剤の効果が低い事例があるように耐性菌の発生が懸念される報告がなされていますので、予定の防除体系が同じ系統に偏らないように十分に注意する必要があります。先月号で説明した系統のコード（殺菌剤の場合は FRAC、殺虫剤は IRAC）を確認して使用します。

また、収穫後の防除薬剤として、ベフラン液剤を追加しました。目的としては、次年度の重要な伝染源となりうる鱗片や秋葉での発病を抑制することです。防除時期は8月下旬～11月上旬です。収穫後の防除の重要性はこれまでも本誌で説明していますので、必ず徹底します。

＜ナシのチュウゴクナシキジラミ＞

平成 23 年に発生が確認された侵入害虫チュウゴクナシキジラミについて注意喚起を行っています。これまで、ダントツ水溶剤等のネオニコチノイド系薬剤で防除が行われてきましたが、昨年は防除を実施しても密度が低下しない園地が認められました。そのうちの1園地ではありますが、ネオニコチノイド系薬剤に対して感受性がやや低い個体群が認められました。そのため、今後も薬剤感受性のモニタリングを継続するとともに、新たな防除薬剤の探索と登録に向けた試験を開始する予定です。

＜ブドウべと病＞

重要病害の本病に対してゾーバックエニベルを追加しました。本剤は先述の QoI 剤と新規系統であるオキサチアピプロリン（有効成分名）との混合剤です。先述のように、混合剤なので各成分の使用回数が超過しないようにすること、また、防除体系が同じ系統の薬剤に偏ることがないようにします。

＜ブドウのチャノキイロアザミウマ＞

近年、ブドウにおいても本虫の被害が多く、被害が多い事例としては、シャインマスカットおよび本品種と巨峰等を混植している園地で多い傾向にあります。当初は薬剤の防除効果の低下も懸念されましたが、検定の結果から、その可能性は低そうです。では、どのような点に注意すべきでしょうか？ 本虫は軟弱な柔らかい葉や新梢を好みますので、まずは副梢の摘芯および副梢上の2番花（果）房の除去を徹底して、密度の低下を図ります。さらに、巨峰における袋掛け後の薬剤防除は、1回程度実施されていますが、シャインマスカット、または本品種と巨峰等を混植しているような園では袋掛け後も2～3回程度実施します。

＜カキのフタモンマダラメイガ＞

本虫は枝や幹を加害する害虫であり、特に樹勢が低下した樹での被害が多い傾向にあります。これまでは、初期密度の低下が重要であり、そのことを目的として4月中下旬（第1世代成虫発生期）に防除が徹底されてきました。しかし、最新の知見により8月中下旬（第3世代成虫期）に徹底して、越冬幼虫の密度を低下させることが、本虫の防除としては望ましいことが分かりました。すなわち、防除時期はこれまでどおりとして、時期別の重要度を改めました。この事例を参考に同じく被害が問題となっているナシにおいても同時期を重点防除時期としました。

＜モモのせん孔細菌病＞

モモの重要病害の一つにせん孔細菌病があります。同じ細菌病のカンキツかいよう病と同じく有効薬剤が非常に少ないため防除が難しい病害です。そのため、①防風対策を講じる、②肥培管理と枝幹害虫の防除を徹底して、樹勢の強化を図ることに加え、「夏季剪定後の秋季防除を徹底する」を明記しました。

＜モモのカイガラムシ＞

モモの難防除害虫としてはカイガラムシ類、特にウメシロカイガラムシが挙げられます。本虫の防除対策の強化として、モベントフロアブルを追加しました。本剤は幼虫に防除効果を示しますので、その年初めて発生する第1世代若齢（1齢）幼虫の発生時期にあたる5月上中旬頃に散布します。

果樹では各種カイガラムシの被害が認められ、どの種類でもいえることですが、薬剤に対して高い感受性（よく効く）を示すのは若齢幼虫であり、その齢期が一番そろっている（若齢幼虫主体）時期が第1世代に当たります。第2世代以降になると、だんだんと各齢期の幼虫～成虫が混在し始めるので、薬剤の効果が表れにくくなります。そこで、今回モモにおけるウメシロカイガラムシの大まかな発生時期を掲載しています（表3）。他の樹種のカイガラムシについては、てびきをご覧ください。

表3. ウメシロカイガラムシ若齢幼虫(1齢)の発生時期

作 型	第1世代	第2世代	第3世代	第4世代
露 地	4月下旬～ 5月上旬頃	6月下旬～ 7月中旬頃	8月下旬～ 9月中旬頃	—
加 温 (2月中旬加温)	3月下旬頃	6月上旬頃	7月下旬～ 8月上旬頃	9月下旬頃

—:露地の第4世代は発生なし

以上が、「令和2年度『佐賀県病害虫防除のてびき（果樹）』」の主な改正点です。

農薬の使用に当たっては、定められた使用方法（対象作物、対象病害虫、使用時期、希釈倍数、使用回数、散布量等）を厳守するとともに、収穫時期の異なる品種を混植している果樹園では、必ず各品種の収穫予定日を基に、各薬剤の収穫前日数を確認して薬剤を選択します。なお、散布した薬剤が風などで園外に飛散したり、薬液がこぼれて水路等に流れ出さないように注意します。また、使用済みの農薬の空き袋・空きビンなどについても適切に処理します。

さらに、冒頭にも書きましたように、農薬の登録内容は残留基準値の見直しなどに伴い随時変更されています。そのため、農薬を使用する際には、必ず、最新の登録内容を確認してください。わからない点や不安な点がある場合は、果樹試験場、農業技術防除センター、普及センター、JAなどの指導機関に必ず問い合わせてください。